

プロジェクトを
ひろげる

B

活動を広げるために必要なことを考えよう。
まちなかでの活動は、パートナーシップや、
ネットワークづくり、活動拠点、地域資源
など視野にいれるべきことがたくさんある。
プロジェクトをステップアップさせる、まち
との関わり方とは。

パートナー

「自分事」として関わってくれる仲間を味方に

アートプロジェクトはひとりではできない。いろんな特技やキャラクターをもった人、他分野の人がそれぞれの知恵やスキルを共有しながら、さまざまな形で参加することができ、進んでいくのがプロジェクトの醍醐味ともいえる。各プロジェクトメンバーと共に良いものをつくりあげるため、対等な関係で率直な意見交換をし、相手をリスペクトしながら目的の達成を目指すことができるプロジェクトは成長する。また一緒に仕事



がしたい、関わりたいと思ってもらえるような仲間をつくることはその「事務局」の財産となる。仕事仲間だけではなく、地域の人や行政など、まわりの人々を良い状態で巻き込み、自分のことのように思ってもらえるような関係性を築き、なんだか放っておけない、気になる、助けたい存在になれるプロジェクトも強い。こうした関係をつくることは「事務局」の大事なスキルのひとつだ。困ったときには相談できる人がいる。解決策がなかなか見いだせなくても一緒に悩んでくれる人がいる。間違っことをしたら怒ってくれる人がいる。活動を見守ってくれる人がいる。これといった用がなくても様子をのぞきに來てくれる人がいる。事業が実現したら一緒に喜んでくれる人がいる。いろいろな人にとって大事な存在になることが事業継続に向けた一歩でもある。[YS]

キャッチボール

依頼や交渉のタイミングと伝え方

アーティストやデザイナー、研究者など外部の人々に仕事を依頼するとき、または内部の人間に仕事を任せるときは、最初の依頼の伝え方が肝心だ。誰が、何のために、いつまでに、どのようなことを、どのような条件でお願いしたいのか。まず希望を伝え、そこから交渉をはじめ。相手の専門領域を尊重し、コミュニケーションをとりながら進め方を相談しよう。

スケジュールや予算的に無理はないか。どのようなやり方がお互いにとってストレスがないか。どこまではやってもらいたくて、どこからは自分たちでやるのか、依頼の範囲を確認する。はじめて仕事をする相手であればなおさらのこと、きちんとチューニングを行って、ずれのないイメージ共有をなす丁寧なコミュニケーションが必要である。最初を間違えると最後までずれたままということも。求めることを最大限に引き出すには、やりとりのキャッチボールをしながら、きちんと依頼内容を伝えることが重要である。[YS]

行政との関わり

行政と関わるときに、意識したいこと

行政と文化事業を行う際は、「政策」を意識することが必要となる。行政が関わる公的な活動にはすべて論拠がある。自治体の場合、理念となる条例があり、それを実現するための計画があり、その方針のもとに事業が位置づけられる。さまざまな文化施策の背景には、その活動の目的や指針となる文化政策があるのだ。つまり、継続的に行政と連携した事業を行うためには、公的な事業として行う理由や、社会的な意義などその政策に見合った論拠が必要である。

事業の内容ではなく、その存在意義を語る。「やりたいこと」だけではなく「やるべきこと」によって裏づけること。また、政策的な視点で行政との成果のすり合わせを行うこと。そうすることで、事業はより高い公益性をもつことができる。[RS]

関わりしろ

支える層が厚いほど広がりのある活動になる

持続可能な環境をつくる手段のひとつとして、社会との「関わりしろ」をつくることが考えられる。「関わりしろ」とは、プロジェクトに「関わる」ための「のりしろ」のこと。スタッフやボランティア、サポーターとして運営や企画づくりに関わることもそうである。「事務局」は、そのような関わり方ができるように、さまざまなプログラムを積極的に用意すると良いだろう。地元での活動として、見守ったり、応援したり、情報提供したり、または、興味のあるプログラムに参加者として関わる人を増やすことも「事務局」の大切な役目。関わる人の層が厚くなればなるほどプロジェクトもダイナミックに動いていく。しかしそのためには、モチベーションや参加度合いの異なる人が、お互いの関わり方を許容することも必要だ。プロジェクトを支える人の層の厚さはプロジェクトそのものの成長となる。[50]

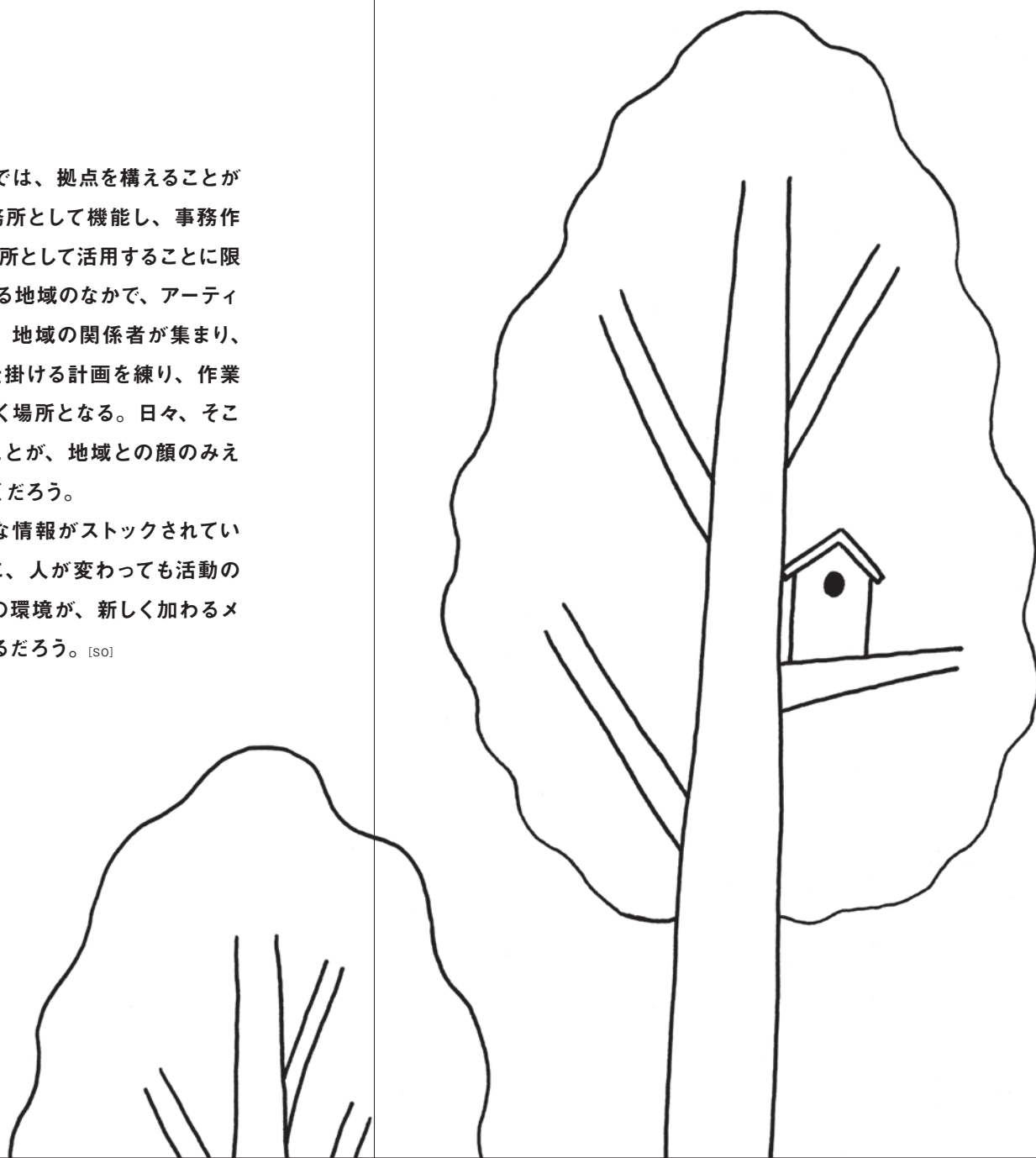


活動拠点

拠点となる場を見つけよう

まちなかアートプロジェクトでは、拠点を構えることが効果的だ。「事務局」の事務所として機能し、事務作業やミーティングのための場所として活用することに限らず、プロジェクトを展開する地域のなかで、アーティストやボランティアスタッフ、地域の関係者が集まり、共にまちにプロジェクトを仕掛ける計画を練り、作業を重ね、活動を発信していく場所となる。日々、そこでざわざわと活動していることが、地域との顔のみえる関係づくりにも有効に働くだらう。

また活動拠点は、さまざまな情報がストックされていく場でもある。部室のように、人が変わっても活動の歴史が蓄積されていく。その環境が、新しく加わるメンバーの育成の助けにもなるだろう。[so]



ハブ機能

人や活動をつなげる取り組み

イベントの実施を主体とするのではなく、アートプロジェクトの活動や団体、人材などを結ぶ「ハブ」としての役割を担うアートNPOの活動も必要である。

「墨東まち見世」¹ アートプラットフォームは、その一例となった。年1回発行している『BOKU-to-Teku Teku まちみてマップ』を通して、隅田川の東岸にあたる墨東エリアに点在する拠点や活動体のネットワークそのものを地域資源として可視化し、発信した。マップに掲載する情報の更新を重ねることにより、ネットワーク形成を促進したり、それらの基盤となるプラットフォームを維持する機能も果たしている。今後は、そのようなハブ型の活動をミッションとするアートNPOなど、多様な活動形態を示していく「事務局」が増えていくだろう。[SN]

1 墨東まち見世→p78

